

接触場面での上級日本語学習者の願望疑問文の問題

大石久実子*

キーワード: 願望疑問文, 接触場面, 回避, 母語からの転移, 弁解による正当化

要 旨

本稿は「～したい(です)(か)?」「～(し)てほしい(です)(か)?」という願望疑問文が日本語学習者によって誤って多用される問題を扱うものである。例えば、レストランでウェイターが“Would you like to order now?”ということは英語では全く問題がないが、日本語では「もう注文したいですか」とは言えず「ご注文よろしいでしょうか」としなければならないように、日本語の願望疑問文には他言語にはない制約があるのである。

本稿では、日本語学習者の願望疑問文の誤用を解明するために、先行研究でもいまだかつてなかった「自然談話から得た自然データ」という形でデータを示し、インタビュー調査の考察を進める。更にすべての被験者に対してフォローアップインタビューを行い、願望疑問文を使用した際の意識、あるいは願望疑問文を回避した際の被験者の意識を明らかにした。その結果、1) 上級学習者の日本語の願望疑問文の使用には母語の負の転移があること、そして、2) 上級学習者の発話に対するコントロールが弱まると願望疑問文の回避ができなくなること、更に、3) 上級学習者はインタビューで願望疑問文を使ったことを認めたがらないことなどが明らかになった。

1. はじめに

本稿は「～(し)たい(です)」「～(し)てほしい(です)」という従来、希望とか願望などの助動詞、あるいは形容詞を作る接尾辞(鈴木 1972: 453))とされる形態¹が、「～(し)たい(です)(か)?」「～(し)てほしい(です)(か)?」というように疑問文の中で用いられたものを「願望疑問文」と称し、上級日本語学習者による接触場面²における使用実態のデータを考察するものであ

* OISHI Kumiko: 慶應義塾大学国際センター専任講師。

¹ 本稿では「たい」が助動詞か接尾辞か、「ほしい」が助動詞か形容詞かということは議論の対象から除外し、益岡・窪田(1989: 112)に倣って、「たい」「(て)ほしい」を命題に対して付される心的態度(ムード)として「事態の実現を望んでいるムード」=「願望のムード」とする(以下、便宜上、「(し)たい(です)」を「たい」で、そして、「(し)てほしい(です)」を「てほしい」で表記することがある)。

² ネウストプニー(1995: 216)の定義によれば「ある文化のメンバーが他の言語や文化のメンバーとコミュニケーションを行う場面」のこと。

る。

願望疑問文が日本語では許容されないという事実は先行研究でもいくつか指摘があるので、調査と考察の前に、代表的なものとして水谷(1985)と鶴田他を参照されたい。

◎ 水谷(1985: 39)

教師に答案などを渡そうとして、「Would you like to look at this? → 先生、コレ見たいですか」としたりする。この場合の Would you like to ~? は実は丁寧な依頼であるから「先生、これをごらんいただけますか」のような丁寧な依頼表現に切りかえなければならない。～欲求表現の主語に二人称をそのまま用いた不適切性に加えて、表現意図と表現方法の組み合わせの誤りをあかしたものと見える。

◎ 鶴田他(1988: 178)

実に多くの場合、英語人日本語学習者は「先生も来たいですか」と言い、日本人英語学習者は Could you come? と言う。こんな日本語で招待されたら、日本人は「冗談じゃない、誰が行きたいものか」と思うだろうし、こんな英語を聞いたら、英語人は「いったいどうしてそんなことを命令されなきゃならないんだ」と腹を立て、～「何か他に目的があるのだな、何に利用するつもりなんだろう」と勘ぐることをさへあり得る。

これらの先行研究では願望疑問文が日本語では敬語を使うべき相手に向かって使われた場合失礼にあたることを指摘してはいる。しかしながら、今までの研究では日本語学習者による実際使用の自然談話のデータはいまだかつて提示されたことがない。

本稿では、インタビュー調査から得た上級日本語学習者による願望疑問文の実際使用のデータを示す³。提示するデータは、自然談話から採った自然データの形で示すことにする。更に、すべての被調査者にフォローアップインタビュー⁴を実施し、願望疑問文を使用した学習者と回避した学習者の意識の違いを明らかにする。これにより、上級日本語学習者の願望疑問文の使用と回避の問題が解明できると思われる。

2. 調査の前提として

2-1. いわゆる発話行為内行為的効力について

一般に、話し手がコンテキスト上で発話に込める運用論的機能は「発話内行為的効力⁵」(illocutionary force; Austin (1962), 訳語はリーチ (1987) より)とされるが、本研究でもこれを採用する。具体的には、命令、依頼、忠告、申し出、勧誘などの機能がある。ここでこれらの機能

³ 今回のインタビュー調査はあらゆる習得段階にある日本語学習者を対象に行ったが、本稿では紙幅の都合上、上級学習者のデータに絞って考察を進める。

⁴ ネウストブニー (1995: 200) によれば「データ収集の全期間にわたってすべての参加者の意識を詳しく調べる」こと。

⁵ Trask (1993) では、発話内行為的効力 (illocutionary force) を次のように定義する。

The communicative intention of an utterance, which may be that of a request for action, a request for information, an order, a warning, a promise, an offer or a threat, or of many other possible such intentions.

	行為者	利益の受け手	返答
忠告	H	H	聞き手は受け入れるか否かは問題外
命令	H	S/H/SH	権威的で聞き手に否定する余地を残さない
依頼	H	S/H/SH	話し手が聞き手に否定する余地を残す
申し出	S	S/H/SH	聞き手が決定権を持つ
勧誘	H/SH	S/H/SH	聞き手が決定権を持つ
許可求め	S	S	聞き手が決定権を持つ

S: 話し手, H: 聞き手, SH: 話し手と聞き手.

を以下のように定義づけておく。(S: 話し手, H: 聞き手, SH: 話し手と聞き手)

2-2. 願望疑問文に関する形態的制約と運用論的制約

まず, Nakanishi (=Oishi: 1994) では, 願望疑問文が英語では依頼・命令・勧誘・忠告・許可求め・申し出という様々な発話内行為的効力を持つことがあるのに対して, 日本語では聞き手に積極的な願望がある場合の申し出にしかならないという運用論的な差異と制約を例とともに示した。

更に, 大石 (1996: 16) では, 「たい」「(て)ほしい」という形態の語彙的意味の差を指摘し, 「願望疑問文」の仮説⁶を設定し, それを記述式アンケートにより検証した。英語を母語とする日本語学習者の「願望疑問文の仮説」とは次のようなものであった。

英語を母語とする日本語学習者は, 日本人との接触場面において「～(し)たい(ですか)?」「～(し)てほしい(ですか)?」という願望疑問文を不適切に多用する。これは, 日本語と異なり, 英語の “want” には, 「～する必要がある」「～しなければならない」という意味が含まれるためである。英語ではたとえ「～(し)たい」という積極的願望がなくても「欠乏している事物を埋める義務的必然性」の有無を尋ねる時にも願望疑問文が使用できるからである。これに対して日本語の「～(し)たい, ～(し)てほしい」では聞き手に積極的願望がある場合しか願望疑問文が許容されない。

この事実は願望疑問文の日本語と英語の形態的意味の差異に起因するものである。しかしながら, 願望疑問文の誤用には, 形態的要因だけでなく, 運用論的, 社会文化的要因も関与すると思われる。本稿のインタビュー調査は願望疑問文の誤用に関与する様々な要因を解明する目的に行うものである。

⁶ これらの発話内行為的効力は互いに連続的である。例えば, “Would you like to come and sit down?” Leech (1980: 26)” という例を借りれば, これはコンテキストに応じて「勧誘」にも「依頼」にも「指示」にも解釈できるのである。このように, 発話内行為的効力は連続的であり, 必ずしも一つの発話が一つの発話内行為的効力だけを有するとは限らない。表は蒲谷 (1993) を参考にしたものである。

⁷ 大石 (1996) では「願望伺い」という用語を使用した, 「伺う」という語に謙譲語的な意味合いを含むので, 今回は形式を表わす用語として「願望疑問文」を採用した。

2-3. 願望疑問文による誤用の種類

調査に入る前に、ここでは筆者がインフォーマルな場面で記録した自然データを示し、願望疑問文の問題の種類を分類しておきたい。

1) 聞き手に積極的願望がないとわかっている場合で用いられたデータ

まず、聞き手に積極的願望がないとわかっているのに、願望疑問文が使用されたデータとして、データ 1、データ 2 を挙げる。

データ 1:

日本語の授業が始まる直前に、あるドイツからの留学生 FS1 (FS: Foreign Speaker of Japanese の略号) が「成績のことでクラス担任の H 先生に話があるのだが…」と NS1 (NS: Native Speaker の略号) のところへやって来た。その日の授業担当者 NS1 は、授業後、その学生を H 先生のところへ連れて行く約束をした。授業後、教卓のところで他の学生の質問せめにあっけし、FS1 を連れて行く時間が遅れていた。そこへ FS1 がしびれを切らして NS1 に話しかけてきた。

FS1: 私は 12 時 15 分に友達にあわなければなりません。

O 先生はいつ H 先生に会いたいですか。

NS1: (何のことかとまどろが、その後、授業前の話だとわかり) ちょっと待って、今すぐ行きますから。

つまり、この学生 FS1 は「自分は急いでいるから、これ以上待つことはできない。早く H 先生のところへ連れて行ってほしい。一体いつ連れて行ってくれるのか」ということを意図したのであろうが、NS1 の方は「H 先生に会いたいと思っている訳ではない」ので両者に食い違いが生じたのである。

データ 2:

日本に留学中のオーストラリア人大学生 (FS2) が、日本人チューター (NS2) に電話をかけてきて、都合が悪いので、日本語を一緒に勉強する約束の日時を変更したい旨、伝える。

FS2: あしたは、アルバイトがあるから行けないんです。

NS2: ああ、そう。いいよ。じゃあ、別の日にしよう。

FS2: いつ会いたいですか。

NS2: (驚きながら) う、うん、じゃあ、金曜日の 3 限はどう？

この場合、NS2 はチューターとして FS2 に会うという自らの職業的義務感と、「会いたい」という FS2 の問いかけにギャップを感じたのである。NS2 の気持ちとしては「会いたいという訳ではないが、会わなければならないのだ」という方が適切なのである。

以上、二例は、聞き手に積極的願望がないとわかっているのに願望疑問文を使用した誤用である。これは、大石 (1996) で提示した英語と日本語の願望表現の形態的意味の違いに起因すると

考えられる。つまり、英語の願望表現では「～しなければならない」「～することになる」「～する必要がある」といった義務や必要性を表すことができるが、日本語ではそういった意味がないために、上記のような問題が生じたということである。この二例は、たとえそれが敬語を使う必要のない年下の相手や親しい友人に向かってでも許容されない。

2) 聞き手に積極的願望がありそうだと思っている場合のデータ

次に、前項とは違って、聞き手に全く積極的願望がない訳ではないと思われるデータを見られたい。

データ 3:

大阪に住むある日本語の教師 NS3 が京都の祝園(ほうその)という田舎の駅で開かれる学生のパーティに招待された。パーティが終わって、帰宅する時、あるカナダからの留学生 FS3 が、帰りの電車の本数が少ないのでその教師(NS3)のために時刻表を見てくれている場面である。祝園から大阪への交通はJR 学研都市線と私鉄の二つがあり、どちらでも大阪駅に着くことになるが、その学生 FS3 は二つの時刻表を手にして、次のように発話した。

FS3: 先生、学研都市線に乗りたい?

この場合には学生が教師に話しかける場面であるということが問題になる。もちろん、「学研都市線の方がいい」という表現が最も適切ではあるが、「学研都市線に乗りたい?」という発話は相手によっては許容される場合がある。従ってこのデータの不自然さは「聞き手の私的領域⁸に介入することは失礼である」という社会文化的制約に起因するものであると言えよう。

3) 聞き手に願望があるかどうか不明である場合のデータ

最後に、聞き手に願望があるか否かが不明な場合、つまり、字句通り、願望の有無を聞き手に問いかけるデータを示したい。

データ 4:

これはオーストラリア人留学生が日本でのコミュニケーションの問題について意見を述べる作文から得たデータである。その問題の内容は、日本に留学中のアメリカ人留学生の話で、「ホストファミリーが過干渉で、どこに行くにも付いて来て、その留学生は自分一人の時間が持てないと悩んでいる」という話であった。

FS4: ホストファミリーは留学生が出かける時、「一緒に行って欲しいの?」と聞いた方がよかったと思う。

このような場面では、日本語母語話者なら、「一緒に行こうか?」と発話するのが適当だと思われる。これは英語では“Do you want me to go out with you?”という願望疑問文によって申

⁸ 「私的領域」という用語については、益岡(1997)、鈴木(1997)にも指摘がある。

し出をすることが可能であるという運用論的差異に基づくと考えられる。

以上の四つのデータから、願望疑問文の誤用には、(1) 形態的差異にもとづくもの、(2) 社会文化的差異にもとづくもの、そして、(3) 運用論的差異にもとづくものの三種類があることがわかった。更に、各々について、聞き手に積極的願望がないとわかっている場合、聞き手に積極的願望がありそうだと思っている場合、そして、聞き手に願望があるかないか不明である場合に分けられることになる。

2-4. 日本語教育における問題——主な教科書での願望疑問文の取り扱い

前項で示したように、筆者がインフォーマルに収集しただけでもかなり多くの願望疑問文の問題が生じている。では、現在日本語教育で使用されているテキストでは願望疑問文はどのように扱われているのだろうか。現在広く使用されている日本語教科書を調べてみると、以下に示すような分類ができる。

まず最も多いのは、願望疑問文を何の注釈もなく掲載し、それに関連するドリル練習を数多く付けているものである。次に、注釈という形で、願望疑問文の使用制約は記載してはいても、ドリルとしてはやはり願望疑問文を扱っているものが多く見られた。このような願望疑問文の扱いでは、実際、ほとんど全ての日本語学習者が日本語学習の初級段階で願望疑問文を避けて通ることはないと思われる。これが、多くの願望疑問文の誤用を助長しているとも言えなくはないだろう。(以下、各テキストの抜粋を紹介する。)

1) 願望疑問文を何の注釈もなく掲載しているもの

1-a) 『JAPANESE FOR TODAY』(1973) Osaka University of Foreign Studies, Gakken

- ・ Anata wa kamera ga hoshii desu ka? Do you want a camera?

Iie, kamera wa hoshiku nai desu. No, I don't want a camera.

1-b) 『しんにほんごのきそ1』(1993) 財団法人海外技術者研修協会

- ・ 第13課 何を 買いたいですか(ビデオ)...ビデオを 買いたいです。

1-c) 『初級日本語 東京外国語大学』(1994) 留学生日本語教育センター

- ・ 第14課 外国へ行く →あなたは 今 外国へ 行きたいですか。

→はい、わたしは いま 外国へ 行きたいです。

→きょねんも 行きたかったですか。

→いいえ、行きたくなかったです。

2) 願望疑問文の使用に関する制約を注釈として掲載するが、実際には練習ドリルとして扱っているもの

2-a) 『JAPANESE FOR EVERYONE』(1990) Susumu Nagara, Gakken

第5課 あなたはどこへいきたいですか。

何が飲みたいですか。

- Note 2: 「～たい」 is generally not used to suggest some sort of action, in the way that English "Would you like to-?" is used. Instead use 「～ませんか」.

Ex. 1. A: ひろこさん、やまに いきたいですか。

Are you wanting to go to the mountains, Hiroko?

B: いいえ、いきたくありません。

No, I am not.

2. A: ひろこさん、やまに いきませんか。

Would you like to go to the mountains, Hiroko?

B: ええ、でも、ちょっと つごうが わるいんです。

Yes, but I'm tied up at the moment.

- Exercise あなたはどこへ行きたいですか。(抜粋)

2-b) 『Situational and Functional Japanese (Volume 1)』(1991)

- Notes (1991: 157)

Expressions of one's wishes too directly is generally avoided in Japan, especially by junior people in front of seniors; instead, less direct expressions such as ～たいんですが and ～たいと思います are used.

- Drills (1991: 145)

食べる〈何〉Q: 何が食べたいですか。

A: てんぷらが食べたいです。

3) 二人称の願望疑問文はドリルに載せていないが、三人称の願望疑問文を扱っているもの

3-a) 『An Introduction to Modern Japanese』(1977: 179)

Osamu Mizutani, Nobuko Mizutani, The Japan Times, Ltd.

第十五課 とても 来たがっていますか。

- While kitai is used with the first person, kitagatte-iru is used with the third person.

- ex. ningyoo-o kau

A: Ningyoo-o kaitai-to omoimasu.

B: Soo-desu-ka. (B walks over to C)

C: ...san wa nani-o shitagatte-imasu-ka.

B: Ningyoo-o kaitagatte-imasu.

3-b) 『YOOKOSO! An Invitation to Contemporary Japanese』(1994: 378)

Yasu-hiko Tohsaku (University of California, Sandiego) McGraw-Hill, Inc.

- In Japanese, it is considered rude to ask someone what he or she desires directly.

This is especially true regarding the desires of socially superior people.

For instance, it is very rude to ask someone

すきやきが食べたいですか。

Do you want to eat sukiyaki?

Rather, Japanese speakers tend to ask

すきやきを食べませんか。

Won't you eat sukiyaki?

- 練習) ブラウンさんは今夜何を食べたがっていますか。

4) 願望疑問文に制約があることを指摘し、ドリルなども一切使用していないもの

4-a) 『A COURSE IN MODERN JAPANESE VOLUME ONE』(1983: 144), Ootsubo

Kazuo, The University of Nagoya Press.

- In Japanese culture, it is not good manners to ask one's superior's desire directly.

Instead, you should say "X wa doo/ikaga desuka."

Example A: Sensee, koohii wa ikaga desu ka.

"Would you like some coffee, professor?"

B: Ee, itadakimasu.

"Yes, please."

4-b) 『敬語』(1988: 26) 平林周祐・浜由美子(外国人のための日本語例文・問題シリーズ 10)

荒竹出版

- 「目上の人」に使えない表現

「～たい」「～たがる」「～てほしい」などを使って、「目上の人」の願望に関して直接聞いたたり、述べたりすることはできない。

テキストではないが、次に示すように日本語教育に使われる日本語文法概説書にも願望疑問文の言及がある。しかしながら、これらの文法書は願望疑問文が勧誘としては許容されないということしか言及していない。

◎ Makino and Tsutsui (1986: 445) "A Dictionary of Basic Japanese Grammar" The Japan Times

Vmasu tai cannot be used to express an invitation. The following sentences are inappropriate in invitation situation.

あした食事に来たいですか。

Ashita shokuji ni kitai desu ka.

(Would you like to come to dinner tomorrow?)

- ◎ Senko Maynard (1990: 213), "An Introduction to Japanese Grammar and Communication Strategies." The Japan Times

Warning: Although in English the expression do you want to and don't you want to are informal invitations, as in 'do/don't you want to go out tonight?', the Japanese question with [-tai] expression does not connote this invitational meaning. Kon'ya deketai-desu ka? is a straightforward question asking if one wants to go out; it is not meant to be an invitation. To express an invitation, as we studied earlier, the non-past negative form is used; kon'ya dekaemasen ka? 'wont you go out tonight?' Note also that the [-tai] expressor is not normally used when addressing one's superior.

以上のように、ほとんどの日本語のテキストが願望、及び、願望疑問文に触れており、日本語学習者が日本語習得の過程において、願望表現、及び、願望疑問文を避けて通ることはまずないと言ってよいと思われる。これが日本語学習者による願望疑問文の多用を助言しているとも言えるだろう。

3. 調査の概要

3-1. 調査の目的と方法

このインタビュー調査は、上級日本語学習者が日本語母語話者との接触場面で、願望疑問文を使用する条件を調べるために行ったものである。インタビューは、筆者がインタビュアーとなり、1996年6月から11月にかけて大阪、神戸、京都など関西地方で1対1の対面式で初対面の被験者計29名(外国人の日本語学習者20名と日本語母語話者9名)を対象に実施した。

インタビュー中に調査者がメモしておいた点についてインタビュー直後にフォローアップインタビューを行った。聞き漏らした点については、録音テープをもとに後日、日を改めて再度フォローアップインタビューを行った。このフォローアップインタビューは、インタビュー中に被験者が使用した願望疑問文について、あるいは、願望疑問文を使用しなかった被験者に対しては、なぜ回避したのかなどを明らかにするために行った。フォローアップインタビューでは被験者の日本語能力で表現できない場合にのみ英語の使用を認めたが、インタビューでは日本語だけを使うようにお願いした。

本稿では紙幅の都合上、外国人日本語話者20名のうち、上級レベルの学習者7名と日本語母語話者1名(NS2 16歳 女(高校生)言語形成地=大阪)だけを取り上げる。なお、NS1はイン

被験者(日本語学習者)

	年齢	性別(職業)	言語形成地	日本語学習歴	滞日期間(通算)
FS1	27	女(大学生)	オーストラリア NSW (Gosford)	4.5 年	1.5 年
FS2	38	男(大学教官)	オーストラリア (Melbourne)	1 年	9.5 年
FS3	45?	男(大学教官)	イギリス (East Anglia)	3 年	25 年
FS4	27	女(英語熟読)	オーストラリア (Brisbane)	3 年	7 年
FS5	28	女(政府機関員)	オーストラリア (Melbourne)	9 年	4.5 年
FS6	29	女(大学教官)	ブラジル (Brasilia)	10 年	8 年
FS7	23?	男(大学生)	アメリカ (Seattle)	5 年	9 か月

タビュアーであり、被験者ではない。

◎ インタビュー前に被験者に伝えておいたことは以下の3点である。

1. インタビュアーは日本とオーストラリアの関係に興味があり、今後それについて論文を書く予定である。
2. 調査者がその研究についての話をするので、わからないことや疑問に思うことがあれば、その都度質問してほしい。
3. 研究の説明を長々としていると時間がかかるので、研究の内容をカードに簡単にまとめ、それを見せながらインタビューを進める。

その上で以下のカードを一枚ずつ見せながらインタビューを進めた。このカードは願望疑問文の使用をできるだけ誘発しようとする目的で作ったものである(ただし、調査の正当性を保つために、外国人日本語学習者だけでなく、日本語母語話者にもインタビューを行っている)。

使用したカード：(カードは一枚ずつ分かれている。漢字はルビ付きにし、同じ内容をローマ字書きで裏面に示した。)

カード 1: オーストラリアでインタビュー調査、アンケート調査をしたい。

カード 2: 日本とオーストラリアの家族制度と姓 (family name) について調査したい。

3-2. 調査結果

ここではインタビュー調査、及び、フォローアップインタビューから得たデータを示す。

3-2-1. 願望疑問文の種類と丁寧さの解釈の違いについて

まず、FS1 の談話の一部を三つのパラグラフ単位で切り取ってデータ1～データ3として紹介したい。

データ 1) (カード1を渡した後) FS1: あー はい 例えばどういう調査をしたいですか。

データ 2)

NS1: 日本人の先生はいまつか? オーストラリア人?

FS1: あーあー 日本語学科の先生 女性います。

あー

NS1: いいねえ えっ? うん

FS1: オーストラリア人 Hayes 先生 カール ヘイズ 書いてほしい? (紙に

NS1:

FS1: Carol Hayes と書く) 彼女はすごい 日本語すごくうまい

データ 3) (インタビュー終了後テープレコーダーを重そうに抱えて動かすインタビューアに向かって)

FS1: 持ってほしい?

FS1 の使用した願望疑問文は二種類ある。まずデータ 1 は、「どういう調査をしたいですか」という相手の願望対象の種類を確認するものである。これはインタビューアが「調査をしたい」というカードを見せた後の発話であるため、聞き手に願望があることを前提とした発話になる。そしてデータ 2 とデータ 3 は「書いてほしい?」「持ってほしい?」というように、相手が願望の有無が不明な段階で願望疑問文を使用している。いずれも聞き手が初対面の人であるのに願望疑問文を使用したのは不適切な発話になる。

このように、実際、願望疑問文の使用には二種類あり、データ 1 のように聞き手に願望があつて、その詳細を確認するために発話されるものと、データ 2 とデータ 3 のように話し手が何らかの行為を聞き手のためにすることを申し出るために発話されるものがある。FS1 の使用した願望疑問文は相手が初対面ではなく敬語を使う必要のない人であれば、許容される可能性のある発話である。先にも少し触れたように、日本語では、「聞き手の願望に触れることは敬語を使う必要がない親しい相手以外に使用された場合、失礼だと解釈される」という社会文化的制約があり、FS1 はこの制約を侵したと言える。

FS1 はフォローアップインタビューでは、「普段は願望疑問文は使わない」と述べているにもかかわらず、三個所で願望疑問文を使用した。この事実を指摘すると FS1 からは次のような返答が得られた。

データ 4) (筆者による要約)

FS1: 「したい?」とか「してほしい?」と言うことは失礼だと知っているが、インタビュー中は無意識で使ってしまった。たぶん日本人があまり使わないから自分も影響されて使わないのだと思う。

FS1 は日本語学習歴が 4 年半と長いことから、自分の日本語力にかなり自信を持っており、願望疑問文を使ったことが悪いことだと察してか、フォローアップインタビューでは「無意識で

使ってしまった」という弁明を行った。このように自分の日本語の使用について悪い面を指摘されると察知して、自分の日本語を正当化するために弁解してしまうというのは、今回インタビューした学習者のうち、上級学習者にだけ見られた興味深い言語行動であった。比較のために記すと、今回のインタビュー調査で初級の学習者では自らの願望疑問文の使用を簡単に認め、自分の日本語運用能力に自信がないことを付け加えるという特徴が見られた。このように上級学習者からは初級学習者とは全く対照的な行動が得られた。

更に、インタビューで「(その先生の名前を)書いてほしい?」と言ったことについて、「インタビューよりももっと目上で、もっと敬意を払うべき相手にでも、願望疑問文を使用するか」とFS1に質問したところ、次のような弁明をした。

データ 5)

FS1: もし、インタビューの相手が偉い先生だったとしたら、「書いてほしいですか?」とちゃんと「ですか?」と言います。

この時、FS1は「私は日本語の敬意をきちんと使い分けているのだ」と言わんばかりに自信ありげに「ちゃんと」の部分強調して語っている。つまり、FS1は日本語では「～したい?」「～してほしい?」という願望疑問文が失礼だと思うので、「～したいですか?」「～してほしいですか?」というように「デス」という丁寧体を用いれば全く失礼ではないという解釈をしていたのである。そして、同じような場合、英語では“Do you want to ~?”ではなく、“Would you like to ~?”を使うと付け加えた。

実際には、日本語では敬語を使うべき相手には、普通体であろうと丁寧体であろうと、願望疑問文を使うこと自体が失礼に当たるのだが、FS1は日本語の願望疑問文の丁寧さを誤って理解していたのである。FS1が「丁寧体にさえすれば願望疑問文は目上の人にも使えるという判断をしたこと」は、母語である英語からの負の転移だと思われる。英語では、聞き手の願望を聞いてあげることは丁寧な言語行動に位置づけられ⁹、“Would you like to ~?”は“Do you want to ~?”とすれば丁寧な表現になるからである。

更に、FS1の願望疑問文のうち、データ1のみが「です」という丁寧体であるのに対して、インタビューが進行するにつれて、丁寧体が崩れ、普通体が多用されている。インタビューの初めのうちはFS1も緊張していたと回想しているように、日本語に対するコントロールの意識が働いていたのに対し、インタビューが進につれ、緊張もほぐれたころには、日本語に対するコントロールがなくなり、母語である英語のルールを使って願望疑問文による申し出を行ったのである。このように、日本語学習者の願望疑問文はかなり意識していないと思わず出てしまうという傾向があるとFS1も語っている。

⁹ これについては、今回のインタビュー調査で初級学習者のフォローアップインタビューからも実証されているが、本稿では紙幅の都合により、詳細は省略する。

3-2-2. インタビューの主張とフォローアップインタビューの食い違いについて

前項の FS1 のデータでも少し触れたように、インタビューで願望疑問文を使用した上級学習者の全員が自分は絶対、願望疑問文を日本語では使わないと自己申告している。この自己内省による申告とフォローアップインタビューにおける弁解の食い違い¹⁰は上級学習者にだけ見られた興味深い事実である。上級学習者は日本語の願望疑問文を使うことが失礼だと知っているために、自分は使用しないと主張して自らを正当化したいという学習者の意識が働くのだと考えられる。

例えば、FS2 はインタビュー直後のフォローアップインタビューで、日本語では願望疑問文を使うことは失礼だから、自分は絶対使わないと主張した。しかし、後日、編集してインタビューのテープを持参し、データ 6 など FS2 が使用したいくつかの願望疑問文の証拠を聞かせると、その事実を認めたくない様子でデータ 7 のような言い訳をした。

データ 6) FS2: この質問から何が知りたいの?

データ 7) (筆者による要約)

自分は日本語で願望疑問文が失礼だということを知っているのでインタビューの初めの方では、気をつけて話していた。しかし、話せば話す程、内容に入り込んでいって、日本語自体を意識できなくなったために、つい願望疑問文を使ってしまった。

確かに、FS2 はインタビューの前半部ではデータ 8 やデータ 9 のような発話を用いて願望疑問文を回避しているが、後半部でデータ 6 のような願望疑問文を出している。

データ 8) FS2: もととの研究の目的はどういうことなの?

データ 9) FS2: その漠然の目的ってどういうもの?

このように、学習者自身の内省では使用しないと思っていなくても、実際、願望疑問文を使ってしまうという事実が明らかになった。そして、それは学習者の発話に対するコントロールが弱くなった時に出てしまう傾向だということも合わせて確認できた。

この他に多かった学習者からの弁解は、「渡されたカードに“したい”と書いてあったので、自分もつい使ってしまった」というものであった。例えば、FS3 はデータ 10 のように、インタビュー中に願望疑問文を使用しているのだが、フォローアップインタビューでは「見せられたカードに“したい”と書いてあったので影響された」と弁解している。

データ 10) FS3: オーストラリアのどの辺りでアンケートしたいと思うんですか。

¹⁰ これについては、Neustupný (1994) も指摘している。

¹¹ もちろん、データ 10 の「～したいと思うんですか」という形式は「～したいですか」よりも聞き手の私的領域に介入する度合いが低いのだが、今回の考察では紙幅の都合上この点についてのくわしい考察を省略する。

この FS3 の弁解と比較対照するために、全く同じ条件で行った日本語母語話者に対するインタビューでは9名中8名が願望疑問文を全く回避したという事実を挙げておきたいと思う。日本語母語話者は、願望疑問文を使わない代わりに、「なさる」「しはる」などの敬語を使うという結果が得られた。これは、日本語学習者の方のデータと全く対照的で貴重なデータだと言えよう。参考までに NS2 のデータを示しておく。

データ 11)

NS2: え、姓って、あの夫婦別姓とか? ああ 家族制度の方は何をしてはるんですか

NS1: そうそう

NS2 は願望疑問文を回避して「何をしてはるんですか」という大阪方言の敬語を使用した。これについて、NS2 はフォローアップインタビューで年上の調査者に対して「何を調査したいんですか」と聞くのは失礼だと思ったと述べている。

3-2-3. 学習者による発話のコントロール

先にも少し触れたが、上級の日本語学習者では「願望疑問文」を使うことは失礼だという知識があるために、発話のコントロールができていた時は回避ができるのだが、コントロールが何らかの要因によって弱まった時に、願望疑問文が出てしまう傾向がある。次に示す FS4 のデータでは、FS4 の親しい仲にある恋人の登場の前と後で日本語のコントロールが変わってしまった例である。

データ 12)

FS4: (インタビューは被験者の家近くの駅にある某ファーストフードの店で行った。その店の造りはガラス張りで、店の外の人々の動きがよく見える。)

FS4: オーストラリアでっていうのはオーストラリアに行って調査する? そうですね

NS1: はい

FS4: どのような調査ですか (店の外の駅階段を見て)

NS1: それは、具体的に大学とかに行って...

FS4: あっ 私の彼氏が来ました 偶然ですけど、ちょっと待っていただけますか

NS1: ホントに? ええ どうぞどうぞ

(被験者は店の外に出て、外国人らしい彼氏と話している。インタビューは約3分中断した。席に戻ってきた被験者とインタビューを再開した)

データ 13)

FS4: オーストラリアの大学に行って、大学の学生と先生達にどのように

NS1:

FS4: 調査したいんですか。 うん

NS1: どのように? 方法ですか?

データ 12 とデータ 13 の比較からわかるように, FS4 は, 中座する前には願望疑問文を回避していたが, 英語で恋人と話した直後に戻ってきた時には, 話し方に丁寧さがなくなり, 願望疑問文を使った。この言語行動について FS4 はフォローアップインタビューで以下のように述べている。

データ 14) (筆者による要約)

FS4: 恋人はアメリカ人で, 中座した時は英語で話していた。その店に戻ってからのインタビューは, 英語の影響があったと思う。普通, 英語を話す時は願望疑問文をよく使う。英語では相手の願望を聞き, 断る権利を渡すことで丁寧さを表すからだと思う。でも, 日本語では願望疑問文を使わないようにしている。

FS4 のこのデータは, 学習者の発話に対するコントロールがなくなり母語の影響がある場合には, たとえ日本語では願望疑問文を回避することを心がけている学習者でも願望疑問文を無意識に使ってしまうことがあることを示している。

3-2-4. 願望疑問文を回避した学習者

ここでは願望疑問文を回避する言語行動を取った FS5, FS6, FS7 のデータを考察する。特に, FS5 は, 日本語母語話者と同じように願望伺いを回避し, その代わりにデータ 15 のように敬語を用いた。

データ 15) FS5: オーストラリアでどのような調査をされますか。

そして, FS5 はフォローアップインタビューで以下のように述べている。

データ 16) (筆者による要約)

日本語の願望疑問文は丁寧さに欠けると思う。初対面の方に会うことが仕事柄多いので, 願望疑問文伺いは使わないようにしている。願望疑問文を日本語で使わないようにするということは, 日本での仕事を通じて自ら学んだことである。

FS6, FS7 も願望疑問文を回避した学習者であるが, フォローアップインタビューで両者とも自らの日本語習得の過程を振り返って次のように述べた。

データ 17) (筆者による要約)

FS6: 母国の日本語の習得の過程では, 願望疑問文が失礼にあたるということは習わなかったし, 日本での日本語学習でも同様であった。それを知ったのは日本に来て生活をしている中で友人に指摘された時であった。しかし, 失礼だということがわかってから

も、願望疑問文を使わないように努力はしているが使ってしまうと恥ずかしい思いをしたことが今までに何度もある。母語であるポルトガル語では相手の気持ちを聞くことは失礼ではなく、かえって自然な言語行動であるので、今でも願望疑問文を使いたいと思うことがよくある。

データ 18) (筆者による要約)

FS7: 母国での日本語学習で願望疑問文は失礼になると習った記憶がある。日本語の授業で笑劇を作成した時、「食いたい?」と書いたら先生に「食べる?」でいいと訂正された経験がある。だから日本語で願望疑問文を使うのはよくないことだと思い、インタビューでも使わなかった。

以上のように、今回のインタビュー調査で願望疑問文を回避した学習者は、日本語学習の過程でそれを習得したのではなく、日本での生活の中で習得したものだと証言している。このことから日本語教育における願望疑問文の扱いを変える必要があると言わざるをえない。

4. まとめと今後の展望

本稿のインタビュー調査に対する考察から以下のことが明らかになった。

- ・ 上級学習者には、願望疑問文に「デス」という丁寧な文体を使えば丁寧な発話になると考えている者がおり、これは母語からの負の転移だと考えられる。特に、英語では相手の願望を聞くことは丁寧な言語行動になるが、“Do you want to ~?” は、“Would you like to ~?” という丁寧体を使うことで丁寧化されることが大きく影響している。
- ・ 上級学習者は「日本語では願望疑問文を使うことが失礼にあたる」という知識はあるので、コントロールが働いている発話では回避するが、コントロールが弱まると願望疑問文を使ってしまう。
- ・ 上級学習者は「日本語では願望疑問文を使うことが失礼にあたる」という知識はあるので、コントロールが働いている発話では回避するが、コントロールが弱まると願望疑問文を使ってしまう。
- ・ 日本語能力に自信をもっており、願望疑問文が失礼にあたることは知っていると言明したがる。この点で実際には使用するという事実と使わないという学習者自身の自己申告は食い違いを見せる。更に、願望疑問文を使った事実については自らの言語行動を正当化するために、弁解をする傾向がある。
- ・ 願望疑問文を回避した学習者は、願望疑問文が失礼にあたるということを知得したのは日本語の授業からではなく、実際日本に来て生活を始めてから指摘されて覚えたものである。

と述べている。

今回の調査では、紙幅の都合で上級学習者だけを取り出して考察の対象としたが、機会を改めてその他の習得段階にある日本語学習者のデータ、日本語母語話者のデータについても記述することにしたと思う。学習者の母語の種類による願望疑問文の使用の違い、日本語の方言による願望疑問文の差異などについても考察をするデータが既にあることを示して今後の展望としておきたい。

謝 辞

本稿は、大阪大学大学院後期博士課程、及び、オーストラリア・クイーンズランド大学における筆者の研究成果の一部である。研究成果をまとめることを助めてくださった土岐哲先生(大阪大学教授)、J. V. ネウストプニー先生(千葉大学教授)、徳川宗賢先生(学習院大学教授)に心よりお礼申し上げたい。

参 考 文 献

- 大石久美子(1996)「～(し)たいですか?」に代表された願望伺いについて——オーストラリア英語母語話者と日本語母語話者の接触場面での問題——,『日本語教育』91号,日本語教育学会。
- 蒲谷 宏(1993)「待遇表現における省略」,『日本語学』12-9,明治書院。
- 鈴木重幸(1972)『日本語文法の形態論』,むぎ書房。
- 鈴木 睦(1989)「聞き手の私的領域と丁寧表現」,『日本語学』8-2,明治書院。
- (1997)「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」,『視点と言語行動』田窪行則編(所収),くろしお出版。
- 鶴田庸子,ロシター・ポール,クルトン・ティム(1988)『英語のショーシャルスキル』,大修館書店。
- 西尾寅弥(1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』,秀英出版。
- ネウストプニー, J. V. (1979)「言語のモデルについて」,『言語と行動』講座言語第3巻,南不二男編,大修館書店。
- (1995)『新しい日本語教育のために』,大修館書店。
- 益岡隆志(1997)「表現の主観性」,『視点と言語行動』田窪行則編,くろしお出版。
- 益岡隆志・田窪行則(1989)『基礎日本語文法』,くろしお出版。
- 水谷信子(1985)『日英比較 話しことばの文法』,くろしお出版。
- リーチ,ジェフリー, N. (1987)『語用論』池上嘉彦・河上哲作訳,紀伊国屋書店。
- Austin, J. L. 1962. *How to do things with words*. Oxford: Oxford University Press.
- Leech, G. N. 1980. *Explorations in semantics and pragmatics*. Amsterdam: John Benjamins. B. U.
- Nakanishi (=Oishi), K. 1994. Comparative studies of request forms between English and Japanese. Unpublished thesis submitted to the University of Queensland, Queensland, Australia.
- Neustupný, J. V. 1978. *Post-structural approaches to language*. Tokyo: University of Tokyo

Press.

———. 1994. Problems of English contact discourse and language planning. *English and language planning: A Southeast Asian contribution*, ed. Thiru Kandiah and John Kwan-Terry. Singapore Centre for Advanced Studies, National University of Singapore and Times Academic Press.

Trask, R. L. 1993. *A dictionary of grammatical terms in linguistics*. London: Routledge.